一、頭注は簡明を旨とし、主として人名、地名、出典、歴史的事実、難語句等につき、解釈上参考に供し得るかと思われるものに限り、これを選択して注記した。

一、本書は頭注に載せがたいもの五十項を、別に補注篇として巻末に加え、頭注の欠を補うことにした。また、慶滋保胤の「池亭記」は方丈記全篇の結構に影響する所が著しいので、特に補注篇の後に連ね、方丈記理会の一助とした。

一、本書に注解を付するに当たっては、先進諸賢に負うところが少なくなかった。一々芳名をかかげることはしなかったが、ここに謹しんで謝意を表する次第である。また秘籍の閲覧に便宜をお与え下さった公私の図書館、文庫、並に名家各位にも、厚くお礼申しあげる。

一、本書には、底本とした国宝大福光寺本に、主要な諸本十三本を選び解説を加えて、影印縮刷本を附した。

一、本書には誤りや不備の点も、少なくなかろうと思う。それらについては、博雅の方がたのご教示を得て、機会あるごとに訂正につめたいと思う。

昭和四十八年二月十七日

鈴木知太郎

目次

凡例……三
解題……七
本文
ゆく河のながれは絶えずして（序）……一九
予ものの心を知れりしより（世の不思議）……二〇
去ぬる安元三年四月廿八日かとよ（大火）……二〇
又治承四年卯月のころ（大風）……二一
又治承四年水無月のころ（福原遷都）……二二
又養和のころとか（飢饉）……二五
又同じころかとよ（大地震）……二九
すべて世の中のありにくく（安からぬ世）……三一
わが身父かたの祖母の家を（大原山隠棲）……三二
ここに六十の露きえがたに（日野山閑居）……三三
おほかたこの所に住みはじめし時は（今昔の感）……三八
それ三界はただ心ひとつなり（閑居の気味）……四一
抑々一期の月影かたぶきて（不請の念仏）……四一
時に建暦のふたとせ（結尾）……四二
日野山・京都附近地図（方丈記関係図）……四三
平安京略図……四四
補注篇……四五
池亭記……五六
鴨長明小伝……五九
影印本方丈記……六三
諸本解説……九〇

方丈記試論――「構造と意味」「叙実と抒情」――　佐々木八郎　国文学研究　昭和三十七年三月

大福光寺本方丈記における漢字表記語　青木　伶子　成蹊国文　昭和四十四年三月

冒瀆の文芸――仏教文学研究の一視点――　井手　恒雄　国語と国文学　昭和四十五年八月

(一)水の上に浮かぶ泡。「人の身のはかなきことにうたかたをたとへたり（中略）うたかたは水のあはのことをいへり」（方丈記抄）「ふりやめば跡だに見えぬうたかたの消えてはかなき世を頼むかな」（後撰集十三）。

(二)異なる動作作用が同時的に継起して行われることを示す場合に用いられる副詞で、漢文の「且」以喜楽。且」以氷」日。」（詩経）などの語法から来たもの。

(三)「如」此」「如」斯」の語法から来たもの。

(四)禁中の庭を「玉しく庭」というのから転じて枕詞の如く用いたもの。

(五)サ変動詞「尽きす」の未然形に打消の助動詞「ず」の連体形「ぬ」のついたもの。

(六)極めて短命なことをいう。「叢」生糞土中」朝生暮死」（爾雅の蜉蝣渠略の注）

○底本「タ」字の上半部ノミ残リテ、ソノ下半部以下ハ損傷シテ不明。山本ナシ。前、三、鈴本ニヨリテ補ウ。

(七)「世皆不」牢固」如」水沫泡焰」」（法華経随喜功徳品の偈）

(八)倒置法で漢文訓読から来ている。長い引用文を目的語とする場合は「と言ふ事を」を省略することがある。ここはその例。

(九)はかないこの世の住居として(一)住家をさすとするもの(二)旅の宿とみるもの(三)この世そのものとする諸説がある。この場合は(一)とすべきか。

(十)「あさがほ」は木槿（むくげ）のことで、今の「朝顔」ではないという。下学集の説明に詳しい。「何か思ふ何かは歎く世の中はただ朝がほの花の上のつゆ」（新古今集二十）。

ゆく河のながれは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたる例なし。世の中にある、人と栖と、又かくのごとし。たましきの都のうちに棟をならべ、甍をあらそへる、高き卑しき人のすまひは、世々を経て尽きせぬものなれど、是をまことかと尋ぬれば、昔ありし家はまれなり。或は去年やけて今年つくれり。或は大家ほろびて小家となる。すむ人も是に同じ。所もかはらず、人もおほかれど、いにしへ見し人は、二三十人が中に僅かにひとりふたりなり。朝に死に、夕に生るるならひ、ただ水の泡にぞ似たりける。知らず、生れ死ぬる人、いづかたより来りて、いづかたへか去る。又知らず、かりのやどり、誰がために心をなやまし、何によりてか目をよろこばしむる。そのあるじとすみかと無常をあらそふさま、いはばあさがほの露にこと

あとがき

本書は丹波国丹波町下山（旧高原村）にある雲晴山大福光寺に収蔵さる、国宝方丈記の原姿そのままの複製である。

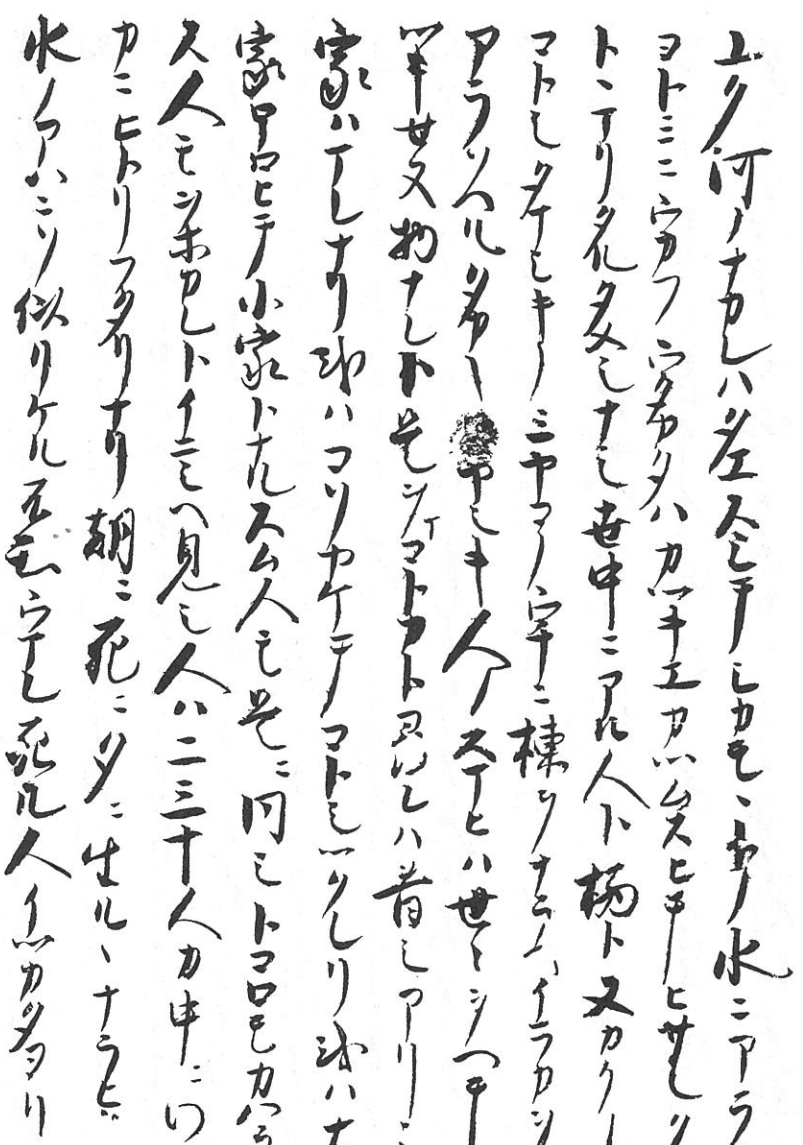
原本は巻子本であり、かつて古典保存会に於かれ若干縮小せられ折本仕立として影写頒布せられた。いまこゝに影印にあたつては、便宜上、保存会本を台本としたが、文字面寸法等は原本そのままに複元し、併て時代経過による紙面の汚染、紙魚喰みの痕跡等は、文字に些かの損傷を及ぼさざる範囲に於いて、努めて之を除去することにした。

原巻子表紙の題簽の文字は、**方**は横1.2cm縦1.5cm、**丈**は横1.6cm縦1.5cm、**記**は横2.6cm縦1.5cmが字面の実物寸法であって、各字の間隙を含みその天地の寸法は4.6cmである。この各文字には些か筆端の朧げなる個処もあり、且つ筆致も本文と異るものとも考へ得るを以て、この複本には本文末の書記を転用した。また表紙の色は縹色と勘定せられてゐるが、現代の化学染法にあつては、なほ之をよく成し難きを考へ、稍之に近似のものを選んで用ゐた。

本書成るにあたつて、現住職山本亮観師を煩し再三に亘る懇切なる指導と斡旋を忝くした。記して以つて深謝の意を奉る。

因に、大福光寺は真言宗御室派に属し昆沙門天を本尊とし、その創建は遠く延暦年間と伝へられ、現本堂は鎌倉、多宝塔は室町時代の建造にかゝり、何れも重文に指定せられてゐる。なほ寺宝に玉篇断簡（重文）等がある。

昭和三十三年三月三日

整版監修者識す

（昭和三十四年四月十五日発行の初版本のあとがきより転載）